



九州体育・保健体育ネットワーク研究会 広島もみじまんじゅうラウンド 活動報告



令和8年2月14日（土）、福山大学社会連携推進センターを会場に、広島もみじまんじゅうラウンドを開催しました。当日はハイブリッド形式での実施となり、19名の先生方や学生さんにご参加いただきました。「児童・生徒の学びをつなぐ体育・保健授業の在り方」をテーマに、校種を越えて、子どもたちの学びをどのように“つなぐ”ことができるのか、知恵を出し合いました。

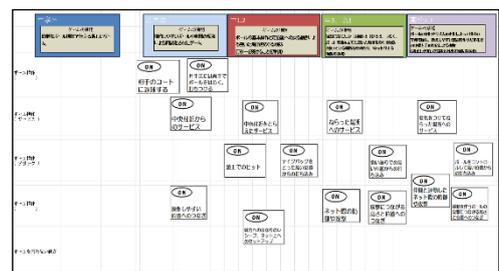
第1部：広島県内の実践・研究発表

広島県内2名の先生の実践・研究発表が行われました。福山平成大学大学院の三村季里さんからは、「約束組手の教育的可能性の検討 ―中学校体育における空手道の教材化に関する一考察―」について報告がありました。武道のもつ価値や意味を改めて問い直し、技能だけでなく人間形成の視点を含めた空手の教材化の可能性が示されました。続いて、広島県教員委員会が主催する研修で、東広島市立小谷小学校大垣拓也先生が発表された「スタディ・ログを活用した器械運動の実践」についての報告がありました。学びの足跡を「見える化」することで、子どもたちが自らの成長を実感し、次の課題に主体的に挑戦する力を高める取組であり、参考となる実践でした。



第2部：系統化ゲームを通して「学びのつながり」を考える

後半はグループワークとして、ネット型を題材とした「系統化ゲーム」を通して、小・中・高と続く学びの流れを整理しました。「どういう過程を経て、高校で学んでいるのか」「小学校では何が大切にされているのか」など、学びの質の変化という視点から話し合いが進みました。同じ“ネット型”でも、発達段階によって子どもたちの学びがどのように変わっていくのか、改めて実感する時間となりました。桐蔭横浜大学の佐藤豊先生からは、子どもたちの学びの姿を考える上で、今の世の中の政治や経済の動き、そして現在の教育の姿の背景にある歴史についても意識を向けることが大切であるとのお話がありました。自分の担当する学年や校種だけでなく、子どもたちが生きていくその先の世の中を見据え、体育・保健体育の中で、こういった力を育てていくとよいのか、強みをどう生かしていくのかなどについて共有され、大変刺激的な時間となりました。このように集い、対話する場の意義について改めて考える機会にもなりました。



おわりに

今回のラウンドを通して改めて感じたのは、体育・保健体育の学びは、単元や技能で分断されるものではなく、12年間を通して深まっていくものだということです。それぞれの校種が役割を果たしながら、子どもたちの学びをどうつないでいくのか、これからも対話を重ねながら、一緒に考えていきたいと思えます。ご参加いただいた皆さま、本当にありがとうございました。（文責：清田 美紀）